

- 海外セミナーレポート① ScholarOne Manuscripts User Conference 2018 in Philadelphia
- 海外セミナーレポート② CSE : Council of Science Editors (国際科学編集者会議) Annual Meeting in New Orleans

ScholarOne Manuscripts 開発元の Clarivate Analytics が世界中の S1M 利用学協会・出版社に向けて毎年開催している「ScholarOne Manuscripts User Conference」が、今年も5月2、3日に、Clarivate Analytics 本社所在地のアメリカ・ペンシルベニア州フィラデルフィアで開催されました。

今回は例年以上に盛況で、アメリカ、イギリスの学協会、出版社を中心に140名の参加者が集い、弊社からは2名が参加しました。



ScholarOne Manuscripts User Conference 2018 in Philadelphia

v4.23バージョンアップと今後のロードマップ

今回のカンファレンスでは、S1Mの最新バージョンであるv4.23の内容、および今後のバージョンアップ予定、外部サービス連携機能の追加等、ロードマップを中心としてプログラムが構成されていました。その内容をご紹介します。

GDPRへの対応

5月25日に施行されたGDPRに対応させるため、ユーザーアカウント画面にプライバシーポリシーへの同意のチェックボックスとユーザーが自身でアカウントを削除できるリンクが追加されました。既に利用学協会様

異常アクティビティ検出ツール

同一論文上で投稿者と査読者が同一のPCからアクセスしている、などの疑わしい状況を検知するツールです。パイロットテストから多くのフィードバックが集まり、その結果が反映されました。また、強度設定が3段階で調整可能になり、審査中の論文も検出レポートがクリアできるようになりました。

リッチテキストエディタ機能

※現在はパイロット段階です
各画面の説明文編集欄でHTMLの書式を簡単に扱うことができるエディタ機能が追加されます。また、Eメールテンプレートにも同様にエディタ機能が追加され、HTMLフォーマットでメールが送信できるようになります。

著者ダッシュボード画面のLegacy Instructions

次回バージョンアップ(v4.24)で著者ダッシュボード上の「Legacy Instructions」が撤去されます。以降の使用はできなくなりますので、ご利用されている学協会様はお早めに別画面での利用をご検討ください。(現在使用しているかわからない場合はサポートセンターへお問い合わせください。)

ファイルアップロード

これまで、投稿時にファイルをアップロ

ードする際にPDFの作成が完了するまで画面を見て待たなければなりませんでした。PDF生成がシステムのバックグラウンドで行われるようになり、ファイルアップロードの待ち時間が短縮されるようになりました。

また、投稿時のファイルアップロード画面がステップ 2へ移動し、PDFプルーフの確認ボタンは投稿の最終ステップのみに表示されるようになりました。

E-Mailレピュテーション

E-Mailレピュテーションは、メール送信元の信頼度を表す指標です。信頼度の低い送信元からのメールはスパムメールとして処理される可能性が高くなります。S1MではこのE-Mailレピュテーションを高水準に保つために配信不能なEメールアドレス宛に送信してバウンスメールが返信された場合、または受信側がスパム扱いした場合に、そのユーザーに対してメール送信を14日間停止するようになりました。ブロック中のユーザーはレポート機能で確認できます。なお、アカウントのEメールアドレスを更新すると直ちに送信が再開されるようになります。

投稿画面設問の文字数制限

タイトルやアブストラクトだけでなく、その他のカスタマイズにより追加したテキストボックスにおいても入力文字数を制限できるようになりました。

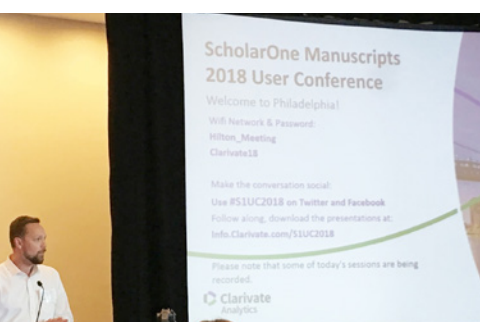
カスタムアカウントバッジ

これまでのフラグに加えて、ユーザーアカウントに対する独自のバッジを追加出来るようになりました。

参加者からは、GDPRやメールアドレス認証についての質問が多く出ていましたが、意外にもそれ以上に異常アクティビティ検出ツールについて多くの質問が出ていました。同ツールは、国内ではあまりご利用いただいておりますが、海外では積極的に利用されているようで、「Retraction Watch(撤回論文の監視・報告・分析などを行っているサイト)と連携しないのか?」など、多くの要望が出されていました。

今後のバージョンアップでは、ジャーナル間での論文転送機能の拡張、Reviewer Locator(査読者選出画面にWeb of Scienceから抽出した研究者を査読候補者として自動的にリストアップする機能)の強化や、ORCID IDとパスワードによるS1Mへのログイン、などが予定されています。

次回リリース時には確定した詳細のご案内が出来ますので楽しみにお待ちください。



にもご案内をしておりますが、5月25日以降に初めてログインするユーザーは、アカウント情報編集画面に移動され、プライバシーポリシーへの同意を促されるようになっております。

Code OceanとDryad

S1MではこれまでもORCIDやPublons(研究者の査読実績管理サービス)、RightsLink(論文掲載料徴収サービス)などの外部サービスと連携してきましたが、新たに「Code Ocean」、「Dryad」などの研究データを扱うサービスとの連携にも取り組んでいるようです。

「Code Ocean」とは、論文の図表などに付随するコードを検索、共有、実践し、再現性の確認が行えるクラウドベースのプラットフォームです。論文の図表には、膨大なデータを著者が解析ソフトなどにより処理した数値の結果が掲載されているものがありますが、公開された論文には著者が数値を解析した基データやコードが付いていないことがあります。このような場合に、著者によりCode Ocean上にコード

がアップロードされていれば、他の研究者は同じコードを使って、解析するソフトを持ち合わせていなくてもCode Ocean上で再現性を検証することができます。また、別の研究者がコードを編集したり、別のデータをアップロードすることも可能で、オリジナルデータの結果とどのように違ってくるかを確認することもできるようになっています。

「Dryad」は、論文のデータセットを収録するリポジトリです。収録されたデータは検索が可能で、自由に再利用や引用を行うことができるようになっています。Code Oceanの例と同様にデータセットを論文に付けて公開することが難しい場合でも、Dryad上にデータをアップロードしておけば、別の研究者が必要時に利用できる状態となっております。昨年7月時点で15,000以上のデータセットが収録されて

いるようです。

これらについての詳細なアナウンスはまだありませんが、学術出版における研究データの再現性やオープン化・透明化が重要視されつつある中で、これらの外部サービスが今後どのようにS1Mと連携されていくかが期待されます。

ワークショップ

例年は、2日間に渡りカンファレンスで発表が行われていましたが、今年は、発表は1日目に集約され、2日目に新たな試みとしてワークショップが開催されました。ワークショップは複数のセッションに分かれて、ジャーナルの質を向上させるための取り組みやWeb of Scienceへの収録条件およびインパクトファクターに関する講義が少人数のセミナー形式で行われていました。これらの情報は、弊社の英文誌創刊・支援サ



ービスでもご提供しておりますのでご興味がございましたらお問い合わせください。

また、レポート機能のセッションにも参加しましたが、こちらは弊社が国内のご利用者様に向けて行っているS1Mワークショップと同様に、講師が一通り説明をした後で参加者が操作を体験するという内容でした。これまで知らなかったツールもありましたので、今後の弊社S1Mワークショップの際にこれらの内容をご紹介しますと思います。

5月4日～9日、国際科学編集者会議 (CSE : Council of Science Editors) の Annual Meetingがアメリカのルイジアナ州ニューオーリンズで開催され、今年も2名のスタッフが参加しました。

その中でも参加者の関心の高かった2つのトピックについて報告いたします。

り早く、手軽に公開できるメリットがあります。プレプリントサーバーは1990年代以降、物理や数学の分野でarXivを代表するサーバーで普及し、この5年間で医学を含む生命科学の分野専用のbioRxivが登場し、投稿が増え続けています。

この様な流れに関する議論の中で、複数

サーバーからの削除や、一定の公開禁止期間を条件とするジャーナルもあります。今後プレプリントは増加し続けると見られており、ジャーナル編集者は動向に注視しながら投稿規定を含むジャーナルの方針を決める必要があることが強調されました。

SingleとDouble-blindのどちらが望ましいか、についてアンケートを実施したところ、著者では殆ど差が無かったのですが、査読者ではDouble-blind を好む傾向にある、という結果が出ました。その理由は著者に対するバイアスを避けることができ、より公平で率直なコメントが可能になることが挙げられました。

また、調査結果によると、Double-blind がSingle-blindより公平で厳しい審査がされ、リジェクト率が高くなり、より質の高い論文を生み出すことができるという報告がありました。一方Open peer reviewに対して査読者は賛成と反対が半々でしたが、少しずつ同意する査読者の総数が増えています。この背景には、査読者情報を開示することで査読コメントの質が向上し、同様に著者回答にも影響がある

ようです。Open peer reviewを導入しているジャーナルは著者のジャーナルへの満足度が高く、また、査読者にとっても査読実績として公表できることがメリットとして報告されています。さらには査読における利益相反や成り代わり等の不正行為を防ぐという利点もあるということです。

学術出版におけるオープン化が進む中で、将来的には、Open peer reviewが最も質の高い論文を生みだし透明性のある査読スタイルとして推奨されるべきではないかとの見解が発表されました。

CSE 2018 Annual Meeting

CSE : Council of Science Editors
(国際科学編集者会議)



急速に進む プレプリント (Preprints)

セミナーで最も注目度の高かったのは、プレプリントの出版に関する話題でした。学術論文は通常査読(peer-review)を経て学会誌や学術出版社や大学図書館を介して公表されます。しかしプレプリントは、研究者が査読を経ない論文をサーバー上で公開することを指します。セミナーでは近年、研究者が直接このプレプリントサーバーへ投稿する件数が急増していると報告がありました。研究者にとっては論文をよ

うのジャーナル編集者からは出版倫理を含む様々な問題が挙げられました。プレプリントは正式な論文として認められるのか、参考文献として引用してよいか。プレプリントがジャーナルへ投稿された場合、論文の新規性は認められるか「二重投稿」と見なされるのか。また出版時に著作権はどこが保持するのかなどです。また、ジャーナル側のプレプリントへの対応は様々で、プレプリントの投稿を認めるものと、二重投稿に抵触して受理しないものに分かれます。また公開時には著作権譲渡やプレプリント

Peer-Reviewの違い に関する調査報告

Single-blind vs. Double-blind vs. Open peer-reviewの3通りの査読方針を比較し何が最も良い査読スタイルなのかが議論され、それぞれの長所や短所が紹介されました。まず著者の個人情報が査読者に公開され査読者は匿名とするSingle-blind、次に著者と査読者の情報が互いに非公開であるDouble-blind、最後は著者と査読者の情報が互いに公表されるOpen peer reviewです。あるジャーナルで



第11回 S1Mワークショップを10月16日(火)に開催いたします！

今回は、事務局画面の各種機能とv4.23で追加された機能についてご紹介します。

これまでと同様に、約3時間の少人数制で、画面を实际にご覧いただきながら、操作方法や機能をご紹介した後、皆様にも実際に操作を行っていただきます。疑問に感じたことはその場で気軽にご質問いただけるよう進行してまいりますので、S1Mの初心者の方、ベテランのユーザー様を問わずお気軽にご参加ください。

事前にあらためてメールでご案内をさせていただきます、奮ってご参加ください。

- ダッシュボード画面の各機能と設定
- ユーザーアカウントの検索、作成、編集、マージ (統合)
- 論文情報 (Manuscript Information) ・履歴 (Audit Trail) ・ファイル管理 (Manuscript Files) の各画面内の機能
- v4.23で追加された機能

編集後記

今号では、弊社が参加した2つの海外セミナーについてご紹介しました。S1M User Conferenceでは5月に実施された最新のバージョンアップの内容のほか、Code OceanやDryadといった新しい研究データの取り扱いサービスやジャーナルの質を向上させるポイントなどについての情報を得ることが出来ました。CSEではプレプリントや査読のブラインドなどのトピックがありました。プレプリントは投稿件数だけでなく、受け皿となるプラットフォーム数も近年急増傾向にあるようです。今後も様々な機会を通じて、常に変わり続ける学術業界の中で皆様のお役に立てる有益な情報を収集してまいります。

10月には国内S1Mユーザー様に向けたワークショップを開催いたします。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

S1M NEWS

2018年8月28日発行 第17号

発行 株式会社 杏林舎
〒114-0024 東京都北区西ヶ原3-46-10
TEL. 03-3910-4311 FAX. 03-3949-0230
URL <http://www.kyorin.co.jp>

編集・制作・デザイン 株式会社 杏林舎
E-mail s1mnl@kyorin.co.jp

ORCID iDの集め方

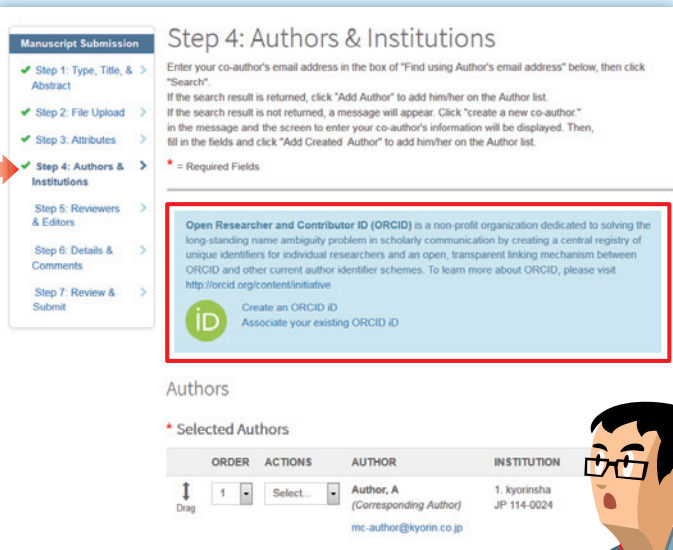
①投稿者からORCID iDを集める

投稿画面の「Step 4: Authors & Institutions」(手順4: 著者)にORCID iDの登録画面へのリンクを表示することができます(図赤枠)。

投稿画面上にかなり目立つ形で表示されますので、投稿者のORCID iD登録を推奨しているジャーナルにお奨めです。

②メール内にORCID iD登録画面へのリンクを表示する

作業開始通知E-Mailなどのテンプレート内に“##PERSON_ORCID_UPDATE##”というE-Mailタグを挿入しておくこと、文中にORCID iD登録画面へのリンクを表示することが出来ます。



例えば、査読者のORCID iDを集めたい場合には査読の承諾メール内にこのタグを設置しておく効果的です!!



こんにちは！ 学術ソリューショングループの山田です。

今回はORCID iDの集め方についてです。ORCID iDの入力を可能としている場合、デフォルトではアカウント情報画面でご入力いただくORCID iDですが、その他にも登録の機会を作ることができます。